

現場の疑問に回答！

# 新学習指導要領が示す 新たな探究の時間とは

「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」へ。

各学校では、その変更の狙いや、これまでとの違いをどう理解し、どのような準備をしていくことが求められているのでしょうか。現場の疑問や不安を、文部科学省の渋谷調査官に投げかけてみました。

文部科学省  
初等中等教育局 教育課程課  
教科調査官

渋谷一典

しぶや・かずのり ●札幌市立小学校教員、札幌市教育委員会指導主事を経て、2017年から現職。国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官を併任。小学校生活科および小・中・高校の総合的な学習の時間に関する研究、指導・助言にあたっている。

Q  
なぜ「総合的な学習の時間」は改訂されたのか

A

20年間の実施成果と課題を踏まえ、さらなる進化を図るため

総合的な学習の時間（以下「総合的な学習」）は、急速に変化し複雑な問題が増えている社会に対応していくため、平成10～11年の学習指導要領改訂で小・中・高校の教育課程に新たに創設された時間です。各学校の創意・工夫に基づき横断的・総合的な学習に取り組むという、かつてない内容に、各学校は試行錯誤を重ねながらも真摯に取り組んできました。

それから約20年が経ち、現在では「総合的な学習」のさまざまな効果が確認されるようになりました。高校では、探究の過程を意識するなかで社会に参画し地域の活性化に結びつく事例や、この時間をきっかけに各教科の学習が主体的・協動的に変わってきた事例が生まれました。また、学習姿勢の改善にも大きく貢献するものとして、OECDをはじめ国際的に高く評価されています。

一方で、課題もあります。学校によって取り組み状況に差があることや、探究の学習プロセスに十分ではない部分があることなどです。今回の改訂では、創設の趣旨は継承しつつ、これらの課題の改善と進化を目指しています。

Q  
「総合的な探究の時間」の目標はこれまでとどこが違うか

A

育成を目指す資質・能力が3つの柱で明示された点に注目を

新旧の目標（第1の目標）を比べると、表現に若干の違いはあるものの、探究の見方・考え方を働かせて横断的・総合的な学習を行うという基本的な方向性に大きな変わりはありません。そのなかで特筆すべきは、育成を目指す資質・能力をより明確化したことです。

今回の改訂は「資質・能力改訂」と呼ばれることもあるほど、学習者主体の視点で、全体的に「何ができるようになるか」が重視されています。すべての教科等で同様なのですが、総合的な探究の時間（以下「総合的な探

●**現行**

第4章 総合的な学習の時間  
第1 目標

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする。

●**新**

第4章 総合的な探究の時間  
第1 目標

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解できるようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協同的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

知識及び技能

思考力、判断力、表現力等

学びに向かう力、人間性等

ご存知のとおり、「総合的な学習」は小学校3年生から始まる時間です。子どもたちは高校入学の段階で7年間、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究のプロセスに繰り返し取り組んできています。高校はそうした基盤の上にあることや、社会との距離がより近くなる時期であることを踏まえ、さらに高度な探究に自律的に取り組んでいくものとして、改めて位置付けが

Q  
なぜ高校だけが「探究」となるのか

A  
小・中の経験を基盤に「高校生ならではの力を存分に伸ばすため

究」の「第1の目標」においても、この時間で育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱から明示されました(図1)。  
1。各学校で「総合的な探究」の目標や内容を定めていく際も、これを踏まえ、具体的な資質・能力を設定していくことになります。

自校では無理などと思わずに、生徒の可能性を伸ばす取り組みを探究してほしい



見直されたのです。今回の改訂で、高校には「総合的な探究」以外にも「理数探究」や「古典探究」など、「探究」と名の付く科目が6つ設けられました。教科・科目等の特性によって若干の違いはありますが、今回の改訂で、いかに高校で探究が重視されているかがわかります。

このように「探究モード」へと加速するなか、「うちの生徒には無理」といった声も聞こえてきます。しかし一方で、学力面・生活面の課題が多い高校ほど、探究の学習活動で輝く生徒が多いとの話も耳にします。正解のない問題に直面した際に、なぜ?と感じたり、どうすればいいのか?と考えたりするのには、いわゆる成績は関係ないと思うのです。内在する意欲や力を引き出し伸ばすことで、時に高校生は私たちが思っている以上のことができる。地方紙などで地域課題や活性化に取り組む高校生の活躍を目にするたび、その思いを強くしています。

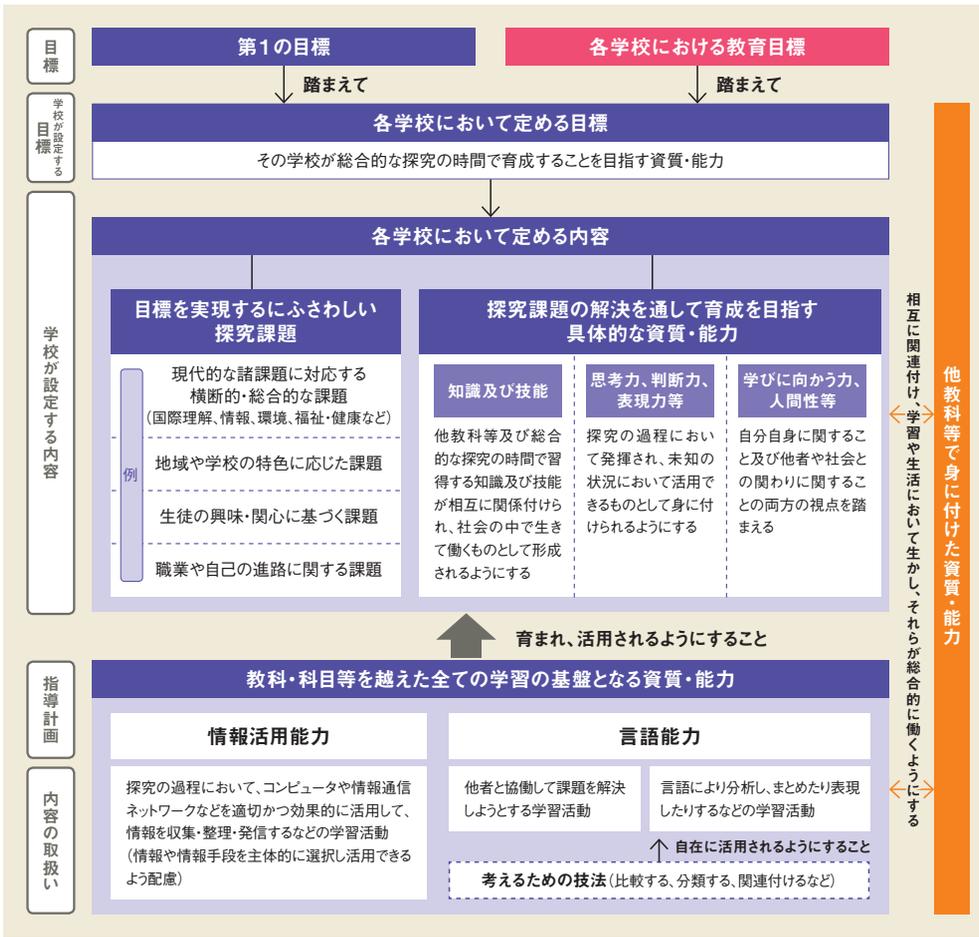
Q  
中学校までの「総合的な学習」との違いは?

A  
高校では「自己と不可分な課題」を「自ら発見」することが大切

「総合的な学習」と「総合的な探究」は、基本的には探究の重要性や学習方法などに共通性・連続性がありますが、一部に異なる点もあります。小・中学校の取り組みを引き継いで発展させていく高校においては、両者の違いを知っておくことも、取り組みを考えるうえで重要です。

「総合的な学習」は課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対し、「総合的な探究」では「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し解決していく学び」とされています。例えば福祉問

図2 総合的な探究の時間の構造イメージ



※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成

「総合的な探究」では、「高年齢者の暮らしを支える仕事に就きたい」といった自分自身の将来像などから探究する課題を設定することが考えられるでしょう。

さらに、「総合的な探究」では、その課題を「自ら」発見することが強調されています。実践においては、社会のつながり、体験学習などを通じて、生徒たちが自分で問いを見だし、課題を設定できるように取り組んでいくことが重要になってきます。

他教科等で身に付けた資質・能力  
相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする

Q 各学校での目標や内容の設定にはどんな影響があるか

A 教育課程の中核として、学校教育目標と一貫性をもたせた設計が必要

新学習指導要領では、各学校において、「第1の目標」と「各学校における教育目標」を踏まえて独自の「総合的な探究」の目標を設定し、その実現にふさわしい「探究課題」(学習対象)と、その課題解決を通して育成を目指す「具体的な資質・能力」を設定していくことが示されています(図2)。

ここで注目したいのが、今回新たに、学校教育目標を踏まえて、この時間の目標を定めることが明記された点です。「総合的な探究」における学習活動が、学校教育目標で目指す理念の具現化に向けて極めて重要な役割を果たすことが、今まで以上に鮮明になりました。ですから、教科・科目等横断的な「総合的な探究」を教育課程の中核に位置付け、各教科・科目等との関わりを意識しながら、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントが

Q 進路指導やキャリア教育などこれまでの内容を変えるべきか

A 探究の過程に適切に位置付けているか、取り組み内容の点検が必要

具体的な活動内容ではなく、その活動の目的が「総合的な探究」の目標や育成を目指す資質・能力につながっているかどうかで判断することが重要です。それにはまず、「総合的な探究」の趣旨の理解から始めることが大切です。その上で、従来の内容が単なる面接指導や補習で留まっていた、探究の過程に位置付けていると見えない場合は、見直しを検討しなければなりません。多忙ななかで簡単ではないかもしれませんが、一歩ずつでも前に進めることが求められます。

今、「総合的な学習」を学んだ経験をもつ先生方が増えてきたことは、力強い追い風です。ベテランと共に若い力も取り込むことで、すべての高校において、「総合的な探究」が充実していくことを願っています。

求められてくるのです。